

(研究報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	悪性腫瘍患者に対する在宅医療の最近 10 年間の変化
演者名	米山泰生 川越正平
所属	あおぞら診療所

研究方法 (右から番号を選び NO. 欄に番号をご記入ください)	1. 症例報告      2. 症例シリーズ報告      3. コホート研究 4. 症例対照研究    5. 調査研究      6. 介入研究      7. 二次研究 8. 質的研究      9. その他研究	NO.
		2
<p>目的</p> <p>急速に高齢化が進む中で、がん患者の在宅における家庭環境、介護環境、診療内容が最近 10 年間でどのように変化してきているかを検討した。</p> <p>方法</p> <p>当院で診療を行ったがん患者で 2003 年に亡くなられた 41 名と 2013 年に亡くなられた 71 名の家庭環境、介護環境、診療内容をカルテから後ろ向きに調査し、その変化を検討した。</p> <p>結果</p> <p>2003 年 (①群) と 2013 年 (②群) の症例を比較すると平均年齢は①69.9 vs ②70.7 歳、75 歳以上の症例の割合は①39.0% vs ②40.8% と 10 年間で大きな変化を認めなかったが、平均同居人数は①2.3 vs ②1.7 人と減少し、独居の割合は①7.3% vs ②14.1%と増加していた。また、主介護者は配偶者の割合が①56.1% vs ②67.6%と増えていた。介護保険の利用率は①70.7% vs ②84.5 と増加し、当院紹介時には、介護保険の申請中の割合は①4.9% vs ②23.9%と増えていた。点滴、在宅酸素、膀胱カテーテルなどの経過中に行われた医療処置については、②群の方が種類や量は増え、複数のカテーテルを付けている症例の割合が①24.4%vs ②36.6%と②群で増えていた。</p> <p>考察</p> <p>家庭環境においては、独居、2 人暮らしの割合が増えており、その理由としては、実際にそのような家庭が増えてきていること、独居でも在宅での療養が行える介護サービスや訪問診療の体制が改善してきていることなどが推測される。介護保険の利用率は上がり、紹介時に申請中の症例が増えてきているのは病院側の退院の際の準備が変わってきていることが推測される。経過中に行われた医療処置に関しては、その種類や量が増えてきており、介護者が少なくなる傾向の中で、処置は複雑となり、より在宅医療の難しさが増してきていると考えられる</p>		